日本近代文学会　関西支部
会報　三四号
二〇二一年一〇月一日

# 会報

## ［巻頭言］

### 初めてのオンライン開催を終えて

荒井　真理亜

二〇二〇年は関西支部にとっても苦難の一年であった。新型コロナウイルス（ＣＯＶＩＤ-19）感染症流行の影響で春季大会は中止せざるを得ず、関西支部との合同開催という形で近畿大学にて開催される予定であった秋季の全国大会もオンライン開催となった。

この間、支部活動は停止していたように見えたかもしれない。しかし、運営委員会は毎月Ｚｏｏｍを使って会議を開いていた。未曾有の事態への対応や関西支部の今後のあり方について、毎回五、六時間にも及ぶ話し合いで検討を積み重ねてきた。

その成果の一つが二〇二一年度春季大会のオンライン開催である。当日は一名の自由発表と特集が行われ、大会後に総会が開かれた。特集は前年度春季大会に企画された「これからの「羅生門」――資料と国語教育の観点から――」である。自由発表者はオンラインで、特集登壇者は会場で発表し、その模様をＺｏｏｍウェビナーでライブ配信した。大会にあわせて大阪市立大学で恒藤恭旧蔵芥川龍之介関連資料の展示も企画していたが、大阪に三回目の緊急事態宣言が発令されて中止を余儀なくされた。

関西支部にとって一年半ぶりの大会で、しかも初めてのオンライン開催である。会場で対応したスタッフ、遠隔で大会をサポートした委員の尽力により、大過なく大会・総会を終えることができた。そして春季大会の成功は、発表者と、ともに研究の〈場〉を作ってくださった約一一〇名の参加者のおかげであることはいうまでもない。

関西支部においてもオンラインによる大会開催の可能性を確認することができた。実際、今回の大会には、従来の対面開催だと参加が難しかったであろう、遠方在住の方や高等学校の先生が多数参加されていた。広く開かれた学会を目指す上で、大会のオンライン開催は有効である。しかし一方で、個々の研究者が自由に交流できないという問題もある。学閥に関係なく世代を超えて広く交流できるのが関西支部の大会である。研究発表だけでなく、休憩や懇親会での会話によって新しい知識や着想を得たり、そこから勉強会や共同研究が立ち上がったりすることもあるだろう。コロナ禍でも大会の開催形態を工夫してそのような交流の機会を作ること、これが次の課題である。

二〇二一年度秋季大会もオンラインで開催する。自由発表は個人発表と関西支部で初めてのパネル発表がある。小特集では新たな試みとして宮川健郎氏のご講演の後にラウンドテーブルを行う。秋季大会も多くの方にご参加いただければ幸いである。

## ［支部大会のご案内］

### 二〇二一年度 秋季大会

日程：二〇二一年一一月一四日（日）
場所：オンライン開催
（Ｚｏｏｍウェビナーを使用）
※秋季大会の参加方法につきましては、同封の別紙ならびに、関西支部公式ブログをご確認ください。

【プログラム】

■開会の辞　関西支部支部長　佐藤秀明
■Ｚｏｏｍウェビナー使用について
■自由発表
三好達治の四行詩―同時代俳論の影響に注目して―　武久真士
■パネル発表
雑誌『小天地』の基礎的研究――明治期地方文芸メディアの一ケースとして――
（パネラー）掛野剛史・竹本寛秋・西山康一
（司会進行）庄司達也
■小特集　児童文学研究と文学館
〈趣旨説明・司会〉　浅井航洋・光石亜由美
〈講演〉
大阪国際児童文学振興財団の一〇年と児童文学研究の新しい可能性　宮川健郎
〈ラウンドテーブル〉
宮川健郎・岡野裕行・森本智子
■閉会の辞　関西支部支部長　佐藤秀明

## ■研究発表

### ［自由発表要旨］

### 三好達治の四行詩―同時代俳論の影響に注目して―

武久　真士

三好達治の詩集『南窗集』（椎の木社、一九三二）などに収録されている四行詩については、従来俳壇の写生論やフランスの詩人ジュール・ルナールの影響が注目されてきた。特に俳論の影響に関しては詳しく論じられており、『ホトトギス』派の花鳥諷詠論を三好が取り入れていたとの指摘がなされている。しかし、同時代の俳論を詳しく調査すると、そこで述べられているのが単なる花鳥諷詠の写生ではなく、詠者の主観と対象が密接に結びついた主客合一の境地を目指したものであることが見えてくる。本発表ではそれを踏まえ、三好が四行詩においてそうした俳論をどのように活用しているのかを分析する。三好は主客合一的〈写生〉を語り手〈私〉と風物の重ね合わせという表現の面に生かしており、そうした詩法は彼の詩論を実現することにもつながっているのである。三好は「詩歌と科学」（『科学ペン』一九三七・一）などの詩論において、読者が詩を読むことを通して詩人の「調和感覚を喚起し再現する」こと、つまり詩人の感覚と読者の感覚が重なることの必要性を主張している。主客合一的〈写生〉が応用されることにより詩で読まれた対象と詩そのものが重ねられ、その結果表現という面において風物を詠む詩人と詩を読む読者までをも重ねることが可能となったのである。三好は西欧流の四行詩（カトラン）に俳句の〈写生〉を組み合わせることで、独自の定型詩を作り上げたのだと言える。

## ■パネル発表

### ［パネル発表趣旨文］

### 雑誌『小天地』の基礎的研究――明治期地方文芸メディアの一ケースとして――

（パネラー）掛野剛史・竹本寛秋・西山康一
（司会進行）庄司達也

本発表では、明治期に大阪で刊行された文芸誌『小天地』（金尾文淵堂）を取り上げて、その編集戦略についてこれまで調査・検討してきたことを報告する。

『小天地』は明治三三（一九〇〇）年一〇月からおそらく明治三六年一月まで、当時大阪心斎橋筋にあった金尾文淵堂が刊行した文芸誌である。この雑誌は『女性』や『苦楽』とともに「大阪刊行誌の冠たるもの」（藤田福夫）と評価されることもあるが、一方でその『小天地』から「どのような文学運動が生みだされたか、どのような作品が生みだされたかとなると、印象はぼやける」（明石利代）とも言われてきた。

「大阪刊行誌の冠たるもの」とされる理由は、同時代に大阪で発行された文芸誌と比較してみるとよくわかる。たとえば、『よしあし草』（明治三〇年創刊、三三年に『関西文学』と改題）など当時大阪で刊行されていた雑誌といえば、ほとんどが地元の若手育成のための同人誌的なものであったのと対照的に、『小天地』は高安月郊、菊池幽芳、須藤南翠といった関西圏で活躍していた作家と同時に、巌谷小波、泉鏡花、川上眉山、与謝野鉄幹、坪内逍遥、綱島梁川、内藤湖南、小杉天外、後藤宙外、島村抱月といった東京圏でも活躍中の著名な作家をも賛助会員に据え、さらには小栗風葉、柳川春葉、国木田独歩、島崎藤村、徳田秋声、永井荷風、馬場孤蝶、正宗白鳥といった当代の流行作家たちの投稿を慫慂してもいる。その意味で、関西文壇の流れと東京文壇の流れが合流するかのような独特の誌面構成をもつ雑誌として、まさに画期的だったといえよう。

だが、その一方で実際に掲載された文学作品を見ると、確かに東京圏の文学動向の後追いの印象が否めず、また独歩の作品を除けば現在まであまり見直されることのなかったものも多い。しかし、『小天地』という雑誌の構成・活動はそうした小説作品に限らず、もう少し多面的に見る必要があり、むしろそれこそがこの雑誌の面白さといえるかもしれない。『小天地』の内容構成としては、おおよそ小説・評論・文苑・雑録・社会・譚園・芸苑・批評・彙報となっている（号によって多少の異同はあるが）。また、これ以外にも投稿募集記事、さらに西洋美術や作家の図版・写真版も多く載せる。そうした多面的な構成・活動の中では、たとえば若き日の松崎天民を中心とした社会欄における探訪記事、あるいは薄田泣菫が中心となって編集することからくる文苑欄・彙報欄における韻文の充実、積極的な投稿募集等々、そこには戦略的とも思える多彩な展開が見て取れるのである。

こうした編集を通して『小天地』という、明治期に地方、特に関西の地に成立した文芸メディアが、いったい何をしようとしていたのか、その戦略はいったいどのようなものだったのか――そうしたことを明らかにすることで、個々の文学作品研究に止まらない、明治期地方ジャーナリズムの一つのありようを、あるいはそれがその後のジャーナリズム全体へもたらした影響などを検討したいと考えている。

なお、本発表は科学研究費補助金（課題番号19k00344「雑誌『小天地』（金尾文淵堂発行）の基礎的研究―明治期大阪文芸メディアの戦略分析―」）の助成を受けて行うものである。

## ■小特集　児童文学研究と文学館

**［企画趣旨］**

文学館や資料館の役割は、関連図書や貴重資料の収集、保存のほかに、資料の発掘、調査研究、そして、それらの資料体を活用することにある。展示やワークショップなどを通じて、資料体の豊かな世界を人々に開くことは重要な役割である。

しかし、近年、地方自治体の財政状況、もしくは、事業統廃合の影響をうけ、文学館や資料館をめぐる状況は厳しさを増している。また二〇〇三年の地方自治体法一部改正によって効率重視の指定管理者制度が導入され、プロフェッショナルな知の継続が危ぶまれている。

我々文学研究者の研究活動は、文学館や資料館の資料蓄積の恩恵の上に成り立っており、現在、文学館や資料館の抱える問題は、今後、研究へも大きな影響を与えるだろう。

今回の小特集では、こうした文学館や資料館の現状を踏まえた上で、児童文学館に焦点を当てる。二〇二一年関西支部春季大会では新学習指導要領の実施をふまえ国語教育における芥川龍之介「羅生門」の小特集を行った。児童文学館とは、上記の文学館や資料館の役割のほかに、教科書と同様に、文学と出会う場を子どもたちに提供し、次世代の文学の担い手を育てる場でもある。

本小特集では、まず、大阪国際児童文学振興財団（ＩＩＣＬＯ）理事長・宮川健郎氏に「大阪国際児童文学振興財団の一〇年と児童文学研究の新しい可能性」と題して、大阪国際児童文学振興財団一〇年の歩み、「児童文学研究」とは何かについてご講演いただく。

そして、岡野裕行氏（皇學館大学）と森本智子氏（甲南女子大学）にご登壇いただき、講演者を交えて「児童文学研究と文学館」に関するラウンドテーブルを行う。ラウンドテーブルでは、まず、児童文学館の現状と課題を検討する。そこから、児童文学研究における児童文学館の役割や、さらには、文学館や資料館と社会・教育との連携など、さまざまな観点から文学館や資料館をとりまく課題や可能性を議論していきたい。

**［講演要旨］**

**宮川　健郎**

大阪国際児童文学振興財団は、かつては大阪府立国際児童文学館の運営母体でした。二〇一〇年三月、吹田市万博公園内にあった大阪府立国際児童文学館が廃止されました。国際児童文学館の資料は、東大阪市の府立中央図書館に移動し、同年五月、同図書館内に新たに国際児童文学館がオープンしました。図書館とは別の入口のあるスペースで、約八三万点の資料は、そこで引きつづき閲覧できます。私たちの大阪国際児童文学振興財団も、同年四月に、やはり同図書館内に事務所を移して、新・国際児童文学館を支援してともに資料収集にあたり、研究および国際的な活動をつづけています。

今回は、大阪国際児童文学振興財団が再スタートしてから一〇年間、どのように考えて仕事をしてきたのかをお話ししながら、児童文学研究における「資料」の意味を量ります。いや、そもそも、「児童文学研究」とは何をすることなのか、何をしてきたのか、歴史的な経緯もふくめてお話ししてみたいと思います。

**［講演者プロフィール］**

**宮川　健郎（みやかわ・たけお）**

一九五五年東京生まれ。立教大学文学部日本文学科卒業。同大学院修了。宮城教育大学助教授等をへて、現在、一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団（ＩＩＣＬＯ）理事長。武蔵野大学名誉教授。日本児童文学学会会長。宮沢賢治学会イーハトーブセンター理事。『現代児童文学の語るもの』（ＮＨＫブックス　一九九六年）、『物語もっと深読み教室』（岩波ジュニア新書　二〇一三年）、大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』全三巻（大日本図書　一九九三年、編集協力）など著書編著多数。

## ■学会印象記　二〇二一年度春季大会

**自由発表**

**矢本　浩司**

午前に行われた大阪大学大学院の高子瑜氏の発表は、前半が芥川龍之介の短篇「尼提」の典拠研究の報告で、後半が「尼提」の主題に関する考察・解釈であった。高氏は先行研究を整理・検討した上で、常磐大定編『仏伝集成』（丙午社、大正一三年一月）が「尼提」の「直接的な典拠であることを検証」した。芥川が『仏伝集成』を読んだという事実の確認はできないものの、「尼提」と『仏伝集成』との相似点（設定や表記の一致点）などを根拠に、『仏伝集成』が「尼提」の直接の典拠であると結論付けた。発表の後半は主題をめぐる解釈の提示で、こちらも先行研究に目配せして、芥川の創作した部分を追った上で、高氏の見解が示された。従来の研究では尼提が肯定的に捉えられているが、高氏は、芥川が創作した尼提の返事と行動の矛盾から、尼提に対する皮肉な視線を読み取った。発表は全体として論旨が明快で、説得的であった。特に典拠研究は手堅く、大きな功績であると思われる。主題の考察・解釈についても、人間性に潜む愚かさが主題であるとし、これまでに指摘がない尼提の人物像に迫っており、研究史に一石を投じている。ただ、先行研究で尼提が「もう一人の芥川が愛した人物像」（浅野洋氏）だと言われていることが、尼提

の人物像の肯定であったと捉えることには疑問がある。というのは、芥川が愛した人物像に愚かさが潜んでいないとは、ただちに言えないからである。また、「皮肉の無いすっきりした短篇」ではないとする高氏の考えには同意するが、果たして皮肉な視線は、「長者と貧者の二人の心理」にのみ向けられたものなのだろうか。愚かな尼提を弟子にした釈迦には、どのような視線が向けられているのか。「わたくしが悪かった訣ではございませぬ」、「如来がお悪かった」と語る尼提は釈迦をどのようにみているのか。愚かな尼提が「初果を得た」ことをどう考えるのか。尼提には冷徹で強かな精神が宿っていまいか。高氏が発表で芥川の「蜘蛛の糸」について触れて、発表の質疑でも「蜘蛛の糸」が取り上げられたが、「尼提」よりもはるかに研究に蓄積がある「蜘蛛の糸」との比較検討が、「尼提」を解釈する手がかりになると思った。高子瑜氏の今後の研究に期待大である。

## 小特集　これからの「羅生門」――資料と国語教育の観点から――

吉川　望

中田睦美氏の「国語教材「羅生門」の来歴」は、教材としての「羅生門」を契機として、新学習指導要領における国語教育について問題提起を行うものであった。まず、「羅生門」の定番教材化に関する調査・分析と、優れた文学教材たるゆえんの考察を示した。そして、高校での小説の学びは他者を想像することや自己理解につながるものであるべきで、「羅生門」はその意義ある最初の経験だと述べた。際立った定番ぶりに驚きつつ、教材として価値を持つとされてきたことに納得もした。「羅生門」を読まない、あるいは小説を学ぶ機会が減ることの影響がどう生じるのか、事の重さを感じた。

岩﨑俊之氏の授業実践報告「高校国語教材における「羅生門」の可能性――これまでの「羅生門」、これからの「羅生門」」は、「主体的」「対話的」で「深い」学びをアクティブラーニングでいかに実現するかという課題に対して、基礎固めの後にＩＣＴ「ロイロノート」を活用する実践例を示した。全員の回答が一度に画面で共有できるだけでなく、座標軸や付箋などのツールで意見を表しやすい仕組みになっていることが分かった。消極的な生徒も、クラスメートの意見に刺激されることで、自ら読むという「主体的」な学びが促されるのではと感じた。

浅野洋氏の講演「〈羅生門〉と小説家芥川龍之介の生成」は、芥川の小説家として立つ意識の発生を白秋からの感化と脱却、失恋体験、武者小路作品への傾倒など、資料の詳細な検討を通して跡づけた。そして、その意識は「羅生門」の改稿に映し出されており、定稿「羅生門」は〈問い〉を投げかけ続けるという小説の本質を備えたものとして成立していると指摘した。資料を紐解き、本文生成を辿って結論に帰結する過程は、スリルある謎解きであると同時に芥川の心の軌跡に触れる生々しさが感じられるものだった。手稿の筆遣いを目の当たりにしたい思いが強くした（コロナ禍により特別展示は残念ながら中止となった）。

討議では、「面白い、深く読めた」という感触を生徒が持てるようにするにはという質問への回答が印象に残った。身近な題材でリアリティを喚起すること、関連資料の導入、教師自身を語ることなどが挙げられ、「羅生門」の教材としての豊かさが浮き彫りになっていた。小説の学習をめぐる状況変化の中では、力ある本文や資料につねに立ち返りながら、巻き込み方・問いかけ方を一層工夫しなければならないと考えた。

## 小特集　これからの「羅生門」――資料と国語教育の観点から――

鈴木　暁世

本特集は、芥川龍之介「羅生門」に関する講演、国語教育の視点からの研究発表と実践報告で構成され、国語教育問題やコロナ禍による授業のオンライン化等の文学研究・教育の環境の変化で見えてきた問題と可能性について活発な議論が行われた。

中田睦美氏は、「羅生門」が定番教材化した理由を外在的・内在的要因の両面から検討した。「羅生門」の戦後初採録の背景として黒澤明監督映画の国際映画賞受賞と昭和三〇年代の世情を指摘、昭和四八年以降の「羅生門」の採録急増への検定制度の影響を指摘した。さらに、現今の高校国語教科書問題を踏まえ、文学研究と国語教育現場の連携の必要性を主張した。会場からは編者レベルでの考察が必要、編集・検閲を考えると昭和二〇年代後半の世情も根拠に求める方が良いという意見があった。

岩﨑俊之氏は、高校での「羅生門」の授業報告を通して、主体的で深い「文学」の学びをいかに実践するかを検討し、ＩＣＴの「ロイロノート」を活用することで多様な問いや解釈、生徒間の議論が触発され、質の高い「学びあい」を可能とする実践例が示された。生徒の理解レベルによって問いに工夫をしているのかという質問があり、抽象的な質問から叙述に沿った質問、主体的に考える質問へと段階的に進むよう構成していると応答があった。

浅野洋氏の講演は、「羅生門」の生成過程を資料と緻密な本文分析を通して明らかにするものであった。「なる可く愉快な小説が書きたかつた」（「あの頃の自分の事」）という言葉を手掛かりとし、「飢えた者は盗んでいい」の論理は武者小路実篤「ある日の一休」（『白樺』大正二・四）に由来すると指摘し

た上で、改稿によってその論理から脱していく過程を論じた。浅野氏が「羅生門」定稿について論じた、小説の本質とは特定の〈解答〉を示すことではなく、〈問い〉を投げかけ続けることであるという言葉は学校で「羅生門」を読む意義をめぐる他二氏の発表と呼応し、本特集構成の妙を感じた。

全体討議では、これから「羅生門」の授業をどう展開していけばいいのかについて議論が行われ、リアリティを喚起するために作中の飢餓や老婆の論理等は現在的な問題であることを示す（浅野氏）、アニメにも「羅生門」に繋がる普遍的な問いを投げかける作品があるため導入として効果的（岩崎氏）等の発言があった。議論を聞き、コロナ禍のため中止となったが大阪市立大学恒藤記念室特別展示における大学院生による資料の翻刻・解題のように生徒・学生が実際に資料に触れる機会を設けることも校種間連携や研究と国語教育をリンクさせる工夫となるのではないかと考えた。

## ■書評

### 西村好子　著
### 『やさしい漱石』

仲　秀和

著者には、漱石についての論文集『散歩する漱石―詩と小説の間』（一九九八）、四編の漱石論を含む『寂しい近代―漱石・鴎外・四迷・露伴―』（二〇〇九）の二著がある。本書はそれらとは趣を少し異にし、漱石をめぐる研究的エッセイと言ってよい。

（Ⅰ）は、十編の「漱石こぼれ話」。漱石についてのエピソードが、様々な視点から語られる。話題が次々と変わり、その連想の妙と意外な指摘に、興味が掻き立てられる。漱石は「甘いもの」好きであり、お菓子を求めて戸棚を物色したのは父母の愛情の欠落への代償行為であったと述べ、又、「辜程な～」「木瓜咲くや～」の句の漱石の「優しい」人柄、「英文学概説」講義の筆記に学生が苦労した理由の一つに筆記用具が付けペンであったこと、第七夜そのままのような事が本当にあり、二、三人が留学帰国前に投身していたという話、修善寺大患での大空との一体感が「則天去私」へ、『道草』の天からの視点につながること、そして、「実業による成功の可能性と燃え上がる命の営み」の舞台である「神戸」を云う。漱石が通り過ぎた地、高木の養子の一人が実業で産をなしたところ（『それから』）、津田の父もそうであり（『明暗』）、安之助が実業にかかわり（『門』）、安井の転地先でもある（同）。子規が保養院で再生した所、晩年交流を持った二人の禅僧の住まいの地と述べ、俳句の絶筆に言い及ぶ。

（Ⅱ）は、「漱石と子規」の二編。中でも「子規と『吾輩は猫である』」は興味深い論で、漱石と子規の交流を述べつつ、「遅れて来たお伽の者が死者に手向ける伽が『猫』であり、苦沙弥邸への迷亭らの引き寄せられ方は、子規の根岸庵への虚子らの引き寄せられ方と同じという指摘や、「山」の意味の解釈など優れて面白い。

（Ⅲ）は、「歴史の裂け目」と題した七編のエッセイである。著者の体験（阪神淡路大震災、国内外の旅など）をおりまぜた、漱石を身近に引き寄せる語りになる。「運動会」や「散歩」の意味（『三四郎』）、『坊っちゃん』、野上弥生子、欧州旅行の感想と『門』、定時制高校教諭の経験や「大学紛争」で味わった衝撃的な出来事（筆者には当時の時代の光景と空気が生々しく甦る）を語るが、これらは著者の漱石研究とどこかで切り結んでいるのだろう。

本書は固い論文から少し離れて、読者に近づきやすい「易しい」漱石を意図して書かれたエッセイ集であり、刺激的で楽しい一冊である。

（二〇二〇年一〇月三〇日
不知火書房　二九〇頁
二二〇〇円＋税）

### 大橋毅彦　著
### 『D・L・ブロッホをめぐる旅
### ―亡命ユダヤ人美術家と戦争の時代』

渡邊　ルリ

著者とブロッホとの「内的対話」（「あとがき」）の旅に導かれる読者が、まず圧倒されるのは、文献・実地調査の精密さであり、それは「ブロッホの生が刻印」されたドイツ・中国各地のユダヤ人関連の歴史文化と政治、ブロッホの家系・居住地や学校の社会的位置・経済生活・展覧会記録や制作材料の収集方法にも及ぶ。そして豊かなブロッホの作品群と自筆資料が、時空を超えてフロス、ミュンヘン、イエナ、ダッハウ、上海、硤石鎮、ニューヨークから共鳴して生み出す新たな意味に捉えられる。

著者の『昭和文学の上海体験』（二〇一七年　勉誠出版）第四部「異民族並びに多言語空間との交渉」中の『黄包車（わんぽつ）　上海の黄包車に関する木版画六十』、ダッハウ関連作品、硤石鎮関連作品の考証は、二〇一七年の硤石鎮再訪とフロス訪問、一八年のフロス再訪等を経た探究の上、歴史的意義と芸術家の生涯において再構成されている。

ダッハウ強制収容所に拘束された体験に根ざす主題ホロコースト、上海の中国民衆へのまなざしを見いだせる木版画と水彩画、一九八〇年代アメリカでの「聾唖」のサバイバー」の芸術活動との繋がりなど、様々な面が連関し、芸術家ブロッホの存在に嵌め込まれていく。作品と自筆資料の多くは、ブロッホ自身や、ブロッホが運命的に出逢えた娘であるリディア・アベル氏により著者に提供されたものであり、二〇〇四年以後アベル氏と

対話を重ねる中で、その人の裡にもブロッホの体験が再生され何度も意味づけられるさまが顕れる。著者は、対者の語りと存在感、資料、風景を受容・吸収し、見えないところの感触を大切にあたためつつ、それらが結び合う瞬間を待ち、二十年の歳月をかけて深化した意味に啓示のようにうたれる。

本書は、調査終了後の収集資料を前提に叙述されるのでも、評伝として時系列で語られるのでもない。芸術創作の各々の場において、読者は、「制作者本人の意識の底に深く入り込み、彼のその後の生を支配する力を持った何ものか」（第Ⅴ部1）が、言葉も意識も超えて「作品世界に反映」するのを発見する瞬間に幾度も立ち会うことになる。

二〇〇一年に『黄包車』に言及したブロッホの著者宛書簡、木版画構図と「ホロコースト・シリーズ」、上海長陽路の住まいの位置、「手」の図像など、いくつも衝撃を受けたが、第Ⅵ部結末に至って静かに押し寄せ感覚を満たしたのは、ブラウクマンの学校跡地から眺望するイエナの全景写真であった。

（二〇二一年三月三〇日
春陽堂ライブラリー　三八八頁
二八〇〇円＋税）



## 鳥井正晴・宮薗美佳・古浦修子　編
## 『「倫敦塔」論集　漱石のみた風景』

増田　周子

本書は、鳥井正晴氏他三名が編纂した、漱石「倫敦塔」の作品論ならびに「倫敦塔」の研究史をまとめたもので編纂者の鳥井氏は『『漱石作品』論集　風景シリーズ』として、すでに、『明暗』論集、『道草』論集を刊行しており、本書は、そのシリーズの第三冊目にあたる。「いよいよこの巻で終わり」とあることから、シリーズの最終巻となるようである。全てこのシリーズは長年開催されていた近代部会研究会での活発な議論に基づいた研究成果が主であることから、関西支部会員の方々にもなじみの本であろう。

さて本書は、「Ⅰ　『倫敦塔』論」「Ⅱ　研究史を踏まえて」「Ⅲ　特別寄稿」「Ⅳ　机上鼎談」「Ⅴ　『『漱石作品』論集風景シリーズ」始末記」の五部構成で組まれ、全十一名の執筆、六七五頁の大著である。作品論は、言語、観光、「余」、時間と空間、「倫敦消息」からの改稿の問題、『帝国文学』という発表場に着眼したものなど様々で、示唆に富んでいる。漱石プロパーではない研究者の論考も含まれ、斬新な視点が垣間見られる。また本書は「倫敦塔」発表誌『帝国文学』の影印抜粋、「倫敦塔」関連の漱石書簡十二通（全て全集収録）に注をつけたものを収録している。さらに「ウォルター・スコットウの明治と漱石」の特別寄稿、「倫敦塔」の注釈、研究史、研究文献目録が掲載されている。すなわち、漱石とイギリス関係がかなり網羅された論集で、本書一冊を手元におけば、漱石とイギリスや漱石の文学的出発の有様がわかる内容となっている。

本書のユニークさは、単なる論文集でないことにある。注釈、研究史、研究文献目録が充実している点が評価できる。例えば、注釈は、約二〇〇頁に亘る大作で、「倫敦塔」に描出された語句と文がどのように他作品と関連しているかを丁寧に記し、関連の先行論をあげている。研究史も、「倫敦塔」研究の着眼点や変遷が整理され、後進の研究者を漱石研究へと導くための一冊となっていることも注視すべきである。編纂者による論文合評が載せられているところも興味深く、論考と併せて読むとわかりやすい。本シリーズのタイトルに「風景」を使用したのは、何故か。「Ⅳ　机上鼎談」によると、物語の背景、すなわち「風景」を認識し、存在への「問い」に迫ることにあるようだ。本書から、「倫敦塔」の背景を認識し、作品の主題と意図を見出してより深い作品理解に至り、漱石の表した普遍の問題、根幹をなすものに迫られればよいだろう。

（二〇二一年四月一五日
和泉書院　六八〇頁
一二〇〇〇円＋税）



## ■二〇二二年度　関西支部春季大会
## 研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇二二年度春季大会における自由研究発表、およびパネル発表を募集いたします。支部会員の皆さまの積極的なご応募をお待ち申し上げます。

◆日時・会場　二〇二二年六月・未定
※詳細は決定次第、関西支部公式ブログでお知らせいたします。

◆募集人数　自由発表　若干名
　パネル発表　若干グループ

◆応募締切　二〇二二年一月三一日（月）必着

◆応募要領　自由発表は、発表題目および六〇〇字程度の（応募段階における）結論までを書かれた要旨を封書でお送りください。パネル発表は、発表題目と全登壇者の氏名と役割分担、および一〇〇〇字から一五〇〇字程度の趣旨文を封書でお送りください。科研費プロジェクトの成果報告等も受け付けております。発表者数は企画者に一任いたしますが、関西支部会員を一名以上入れてください。

発表時間について、自由発表は三〇分程度、パネル発表は二時間程度です。応募の際は、必ず連絡先（電話番号・メールアドレス等）も明記してください。発表に関して、ご不明の点は事務局までおたずねください。

【応募先】〒五五九―〇〇三三
大阪市住之江区南港中四丁目四番一号
相愛大学　人文学部　荒井真理亜研究室内

## ■事務局だより

◆二〇二〇年度支部報告ならびに二〇二一年度支部活動につきまして、会員諸氏より承認をいただきましたことをご報告申し上げます。皆様、ご協力賜りありがとうございました。

◆関西支部会則の改定について

二〇二一年六月五日の総会において、関西支部会則の一部が改定されました。（傍線部を追記または変更）

第三条（事業）

本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行なう。

一、総会の開催。諸問題が発生した場合は臨時に総会を開催する。議事は出席者の過半数の同意をもって決定する。緊急事態などにより、（大会中止に伴い）総会開催が不可能な場合、前年度の会計報告ならびに本年度の予算案に関する資料を会報発送時に同封し、その際、返信葉書など郵送を用いた送信や電子による送信方法をもって、会員より承認を諮ることを可能とする。承認の可否に関しては、支部ホームページにて報告を行う。

三、電子版機関誌の発行、会報・パンフレットなどの刊行、およびホームページなどによる広報。

第五条（役員）

本会に次の役員を置く。

一、支部長　一名　運営委員　若干名
　編集委員　若干名　会計監査　二名

二、運営委員と編集委員は総会における会員の互選により選出する。

五、役員の任期を次のように定める。

1　支部長の任期は二年とし、再任を妨げない。再任の場合はその任期を一年とし、連続して四期の選出は認めない。

2　運営委員と監事の任期は二年とし、再任を妨げない。ただし連続して三期の選出は認めない。

3　編集委員の任期は二年とする。

第七条（編集委員会）

本会に編集委員会を置く。

一、編集委員会は支部長によって統括される。

二、編集委員会は第三条に掲げた事業を立案し、それを遂行する任を負う。その際、必要があれば小委員会を設けることができる。

三、編集委員は編集委員長を互選する。

第八条（経費）

第九条（会計年度）

第十条（会計報告）

第十一条（会則の改廃等）

附則

二〇二一（令和三）年六月五日の総会で改正承認、施行。

◆機関誌の発行について

関西支部の機関誌を発行することが、先の総会にて承認されました。機関誌は電子媒体で発行し、関西支部公式ブログにアップロードする予定です。総会後、機関誌準備委員会が立ち上がりました。二〇二三年三月の創刊を目指し、準備が進められています。

◆献本のお願い

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

○対象となる書籍…支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍

○送付先…関西支部事務局

なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

◆前号の補足・訂正

・前三三号で書評をご執筆くださった以倉紘平氏は詩人として活躍され、近畿大学文芸学部にて教鞭をとられました。遅ればせながら今号にてご紹介申し上げます。関西支部会員外から書評をご執筆くださいました以倉氏にあらためまして御礼申し上げますと共に、ご紹介の遅れましたことを以倉氏ならびに支部会員の皆様へお詫び申し上げます。

・二〇二一年度役員名に、西尾元伸氏のお名前が記載されておりませんでした。お詫びして訂正いたします。

## ■二〇二一年度役員　＊は新規の委員

**支部長**　佐藤秀明

**運営委員長**　荒井真理亜

**運営副委員長**　中田睦美・深町博史

**〔会計・名簿〕**　瀬崎圭二・藤原崇雅・＊八原瑠里

**〔会報〕**　石原深予・川畑和成・福田涼・松澤俊二・＊禧美智章

**〔企画〕**　＊浅井航洋・斎藤佳子・白方佳果・長濱拓磨・西尾元伸・光石亜由美・＊矢本浩司

**〔広報〕**　廣瀬陽一

**〔書記〕**　＊塚本章子・西薗有加利・開信介・＊宮川康・＊吉川仁子


**日本近代文学会関西支部事務局**

〒五五九―〇〇三三

大阪市住之江区南港中四丁目四番一号

相愛大学　人文学部　荒井真理亜研究室内



日本近代文学会　関西支部

会報　三四号　二〇二一年一〇月一日

編集・発行人　佐藤秀明

日本近代文学会　関西支部

〒五五九―〇〇三三

大阪市住之江区南港中四丁目四番一号

相愛大学人文学部　荒井真理亜研究室内

❖「倫敦塔」研究の可能性を呈出する一冊

## 『倫敦塔』論集 漱石のみた風景

**鳥井正晴・宮薗美佳・古浦修子編**　作家・漱石の出発を告げる短篇『倫敦塔』を味い尽くす論集。気鋭の研究者たちによる多彩な論攷9篇に加え、明治～現在までの『倫敦塔』研究史と研究文献目録、評釈と机上鼎談、本シリーズ始末記、他を収録。　新刊・定価13200円（税込）

**Ⅰ『倫敦塔』論**

「『倫敦塔』の言語現象」　特徴的な言語現象と「御殿場の兎」
―虚構を可能にしたもの―　木村澄子
帝国と観光―「反語」としての「倫敦塔」―　松下浩幸
夏目漱石「倫敦塔」論―観光「すること」からの離陸―　宮薗美佳
「余」の紡いだ〈英国〉―夏目漱石「倫敦塔」論―　木谷真紀子
「倫敦塔」再考―「余の空想」は誰のものか　廣橋香文
『倫敦塔』の時間と空間―「過去」への眼差しを視座として―　古浦修子
「倫敦塔」への道―「帝国文学」という発表の場から―　長島裕子
「帝國文學」第拾壹巻第壹　影印（抜粋）　長島裕子
「倫敦塔」をめぐる書簡　長島裕子

**Ⅱ 研究史を踏まえて**

『倫敦塔』論の前提―倫敦塔評釈　鳥井正晴
『倫敦塔』研究史　仲　秀和
『倫敦塔』研究文献目録　村田好哉

**Ⅲ 特別寄稿**

ウォルター・スコットの明治と漱石　野網摩利子

**Ⅳ 机上鼎談―編集のこと・論評**

『倫敦塔』論／研究史を踏まえて／他　鳥井正晴・宮薗美佳・司会　古浦修子
机上インタビュー―木谷さんに聞く　木谷真紀子・司会　鳥井正晴

**Ⅴ『漱石作品』論集 風景シリーズ』始末記**

編集委員会
「謝辞」にかえて―人々との縁（えにし）、という「解」　鳥井正晴
コラム　木谷真紀子

❖混迷する『明暗』研究に論と実証から迫る

### 『明暗』論集 清子のいる風景

**鳥井正晴監修・近代部会編**　論文14篇、『明暗』第二部の現地調査4篇、研究文献目録選を収録。定価7150円（税込）

❖漱石の自伝的小説『道草』論の可能性を極限まで追及

### 『道草』論集 健三のいた風景

**鳥井正晴・宮薗美佳・荒井真理亜編**　論文14篇に加え、大正～現代までの『道草』研究史と詳細な研究文献目録を収録。　定価8250円（税込）

❖前五集の刊行より十年 たゆみない歩みを示す待望の続集

## 論集 泉鏡花 第六集

**泉鏡花研究会編**　十篇の書き下ろしの論考と、最も詳細な「参考文献目録」とを合せもって、泉鏡花研究の最前線を示すべく編集。　新刊・定価7700円（税込）

泉鏡花と俳句―紅葉門下の運座を中心に―　秋山　稔
邑井一と泉鏡花
―鶴扇亭における「小夜衣草紙」傍聴の時期について―　淺野敏文
鏡花、雪岱、千章館―堀尾家旧蔵資料が語るもの―　穴倉玉日
「外科室」と魔酔の物語
―高田早苗遭難事件顚末との関連から―　馬場美佳
「伊勢之巻」における「神」と芸術家の邂逅劇　金子亜由美
〈往生伝〉としての『風流線』
―仏教思想の時代状況を視座として―　川島みどり
「草迷宮」論―自筆原稿から見えること―　市川祥子
泉鏡花「南地心中」の上演
―原作者と脚色者の関係をめぐって―　田中励儀
大正六年五月の帰郷と「卯辰新地」　吉田遼人
映画「葛飾砂子」を辿る―失われた映画（フィルム）を求めて―　佐藤未央子
＊
〈資料〉泉鏡花参考文献目録〈雑誌の部〉補遺七　田中励儀

【好評既刊】　第一集　6600円　第二集　6600円　第三集　5500円　第四集　6600円　第五集　8800円（各税込）

◆既刊五冊揃　34100円（税込）

❖結婚を相対化する主体と親密性の実践を文学作品より抽出

## 結婚の結節点
### ―現代女性文学と中途的ジェンダー分析―

**泉谷　瞬**　1980年代から現在に至るまで活躍する女性作家たちの小説を、結婚制度とそれにまつわる社会状況を照合しながら多角的に考察する。既存の「結婚」を相対化する主体と親密性の実践を、文学作品より探る。

新刊・定価3960円（税込）

第31回宮沢賢治賞受賞

❖賢治の最期にして最大の謎の解明に挑む

## 宮沢賢治「文語詩稿 一百篇」評釈

**信時哲郎**　賢治が自分の生涯や作品、信仰についてどう考えていたのか。この謎を解き明かすため、賢治が妹クニにむかって「なっても（何もかも）駄目でも、これがあるもや」と自信をもって語ったと言われる文語詩を丹念に読み解いていく。　定価7700円（税込）

❖〝文学〟は文壇作家の小説の中だけにあったのではない

## 無名作家から見る日本近代文学
### ―島崎藤村と『処女地』の女性達―

**永渕朋枝**　日本近代文学を無名作家群からも見渡せば、メディアにより文学がつくられていった大きな流れが見える。有名作家と無名作家、男性作家と女性作家、作家と読者との双方を見、雑誌を他の新聞雑誌との連関の中で捉える。　定価5940円（税込）

❖激動の時代にこそ瀧太郎

## 水上瀧太郎の文学
### ―サラリーマン小説の誕生―

**網倉　勲**　瀧太郎の文学的生涯は作家とサラリーマンの生き方を併進した事に特色がある。時代背景と作品を照応し、瀧太郎文学の本質を解明。その根底には、虚偽を糺す正義感と時流に迎合しない批判精神がある。　定価6600円（税込）

〒543-0037　大阪府大阪市天王寺区上之宮町7-6
TEL06（6771）1467　FAX06（6771）1508

和泉書院
いずみ通信呈上　45号
https://www.izumipb.co.jp
価格は10%税込　2021.9